

## ノスタルジア (Nostalgia)

— 「生の記憶」と「時間の不可逆性」を基軸として —

沼田有史

はじめに

人はなぜ故郷を思い出し、ノスタルジアにとらわれるのか。こうしたノスタルジアは通常、昔を懐かしんで感傷に浸り、これを美化し、現実の問題から顔を背けるネガティブなイメージとしてとらえられるが、それだけでノスタルジアの本質を言い得ているといえるだろうか。

二〇一四年、国立国際美術館は『ノスタルジー&ファンタジー—現代美術の想像力とその源泉』と題して、現代美術においてもノスタルジアが絡んでいるとする展覧会を開催した。安來正博はノスタルジアがあらゆる光景と現象を読み解くキーワードのひとつであり、実体験とは関係がないという意味から気分的な心情であるとする。ここからノスタルジアに無限の可能性と表現性を認め、ノスタ

ルジアを時間という永遠の謎に向き合う人間の心情であるとして新しい藝術へと誘う。<sup>1)</sup>

これより前、二〇〇四年には東京国立近代美術館で『ブラジル…ボデイ・ノスタルジア』展が開かれている。鈴木勝雄は当時ほとんど知られていなかったブラジル美術に「身体」への飽くなき関心という特徴を認めてこれに焦点を当て、「ボデイ」と「ノスタルジア」という一見相関性のないような副題を添える。ここにはブラジルという場所に不可避的に縛りつけられた「痛みをもった」身体という意味が込められており、未来への出発の契機としてノスタルジアをとらえようとする視点が包含されているという。<sup>2)</sup>

また欧米ではすでに行われてきたが、我が国の歴史系博物館においても新しい活動として高齢者向け回想法の導入が急速に進んでいる。回想法とは高齢者が故郷の懐かしい写真映像や童謡唱歌、幼少

時代の生活道具などに接することにより昔を思い出し、脳を活性化させて元気にするという医学的、心理学的、福祉的アプローチのことである。こうした試みは現在では臨床的に老化や認知症の予防改善に効果があるとされており、ノスタルジアのポジティブな面を活用している一例だといえよう。<sup>(3)</sup>

こうしてみると、単なる過去への逃避としてとらえられがちなノスタルジアではあるが、人間の創造力、生きる力に何らかの影響をあたえていることがうかがえる。本稿では故郷を想起することにより生まれるノスタルジアが、人間にとってどのような根源的意味合いを持ち、有用性を包含しているのか考察していく。

第一項において、ノスタルジアを感じる契機は一人ひとり異なるとともに、時代によって受け止めかたの変遷があることを明確にしておく。と同時に過去に対して抱く思いが哀惜としてだけでなく、悔恨ともなりえることも押さえる。第二項ではノスタルジアが「非連続」を契機としている点に触れ、いくつかの自然、文明に関する論を参照しながら、ノスタルジアが現代文明への妄信に気付かせる有用な機能となりえることに言及していく。最後の第三項において、ノスタルジアは単に故郷（過去）を想起するだけにとどまらず、無意識のうちに人間に内在する「生の記憶」と、人間が絶対に逃れることのできない「時間の不可逆性」へと繋がっていることを確認する。

## 一 故郷を想起して生まれるノスタルジア

我が国では郷愁を奏でる「故郷」という言葉が古くから使われており、長年に渡り各分野で多種多様な解釈がなされてきた経緯がある<sup>(4)</sup>。と同時に、歴史の荒波に翻弄された経緯もあり、そこには先人観と曖昧さがいつも寄り添っている。

このため時代的变化は多少あるものの比較的歴史が浅く、医学用語として造語されたノスタルジア (Nostalgie) という語で本稿を論じることとする。ノスタルジアという語は一六八八年にスイスの医学者ホーファー (Johannes Hofer 1669-1752) がバーゼルで出版した「ノスタルギアすなわち郷愁に関する医学的論考」において初めて使われた。彼は故郷を離れて暮らすスイス人傭兵に見られる極度の望郷の念を病氣と捉え、それに病名をつけたが、これはギリシア語で「家に帰る」の意を表す *nostos* と「痛み」を指す *algia* とを組み合わせた造語である<sup>(5)</sup>。

一般的にノスタルジアは生地や幼少期を過ごした場所から他の地での生活に移ることにより生じる故郷概念が契機となると考えられるが、そのとらえかたは千差万別である。宮本常一は故郷を大切にしてい出を数多く作ることが大人になったときの助けとなると説き<sup>(6)</sup>、高村光太郎は妻の智恵子が故郷を特別なものとして思慕するさ

まを有名な詩にした<sup>7</sup>。実際、空はどこでも同じだが、智恵子は幼い頃いつも見ていた故郷にある阿多多羅山の上に広がる空だけしかその存在を認めない。反対に夫である光太郎にとっては、東京の空は正しく空そのものでしかない。同じ空がそこを故郷として想いだすことによって特別の空へと変容してしまう。

室生犀星も故郷を懐古する日本人にとつてあまりにも知られた詩を残す。解釈は様々あるものの原風景として故郷を想う気持ちは変わらない。だが故郷は現実には帰るところではないという点で宮本常一や高村智恵子とはニュアンスが異なっているようだ。ましてや幼少期において特定の土地に定住しなかった林芙美子にいたっては、故郷空間をもたないために「故郷なんてどこでもいい」と言い放つ。こうした故郷を顧みることにより生まれるノスタルジアは文藝のみでなく唱歌などにもさまざまに表象され、ただ単純に生まれ育った土地に対する感情としてのノスタルジアにとどまらないものとして表象されていく。このように故郷は一義的に人が生まれた始原の時間を体験した場所（空間）のことであり、この世を認知した源である。しかし、ノスタルジアを醸し出す故郷は実体としてではなく想起されるものであるがために、それぞれの人の故郷感は異なってしまう。

また故郷感は時代の推移によっても変化してきた。現代社会は變動の激しさを増し急速なグローバル化が進み、人間は土地に縛られ

ることが少なくなっていく。このため故郷は現実には存在する土地という概念から過去という時間的な概念へと広がり、ノスタルジアは次第に過去への肯定的なものへと転化しながら感性的性を顕著に示すようになった。

ノスタルジアの変遷を津上英輔は次のように論じている。「当初、ノスタルジアは現代人が異郷から憧れをもって想い描く虚像のような故郷から発せられるのではなく、現実には存在する土地そのものとしての故郷から生まれるものであった。まさにその土地が病気の要因であり、それは外的なものとして理解できた。この初期に現われた負のノスタルジアと呼べるものは十八世紀半ばまでに西洋各国で認知されるようになり、第二次世界大戦頃には通常感情を意味するようになる。と同時にノスタルジアの意味領域が、故郷という空間的なものから過去という時間的なものへ転化し、状況の変化に対して自己を保全するために過去を思い起こす契機となった。逆に過去からの乖離という事実を重視する人にとつては、ノスタルジアは苦痛に満ちたものとしてとらえることになる。つまり現前のもので自らから目を逸らす点では共通した概念であるが、各人が現実とどのような関係を取り結ぶかによってノスタルジアは『快』とも『苦』ともなりうるようになるのである（両価のノスタルジア）。こうした変容の末に、現在ではノスタルジアは過去に対するあらゆる種類の肯定的感情を意味するようになり（正のノスタルジア）、その価

値を大きく変容させている」<sup>9)</sup>

とはいえ故郷を想起するとき、すべての人が肯定的感情をもつわけではない。故郷である過去に対し嫌悪感をもって回顧することそのものを拒絶する人がいることも否定できない。歴史を紐解けば、世界中いたる地域・国において紛争や戦争、また大災害が発生しており、多くの犠牲者や故郷喪失者が生まれている。「忘却、記憶、そして哀悼の不可能性」を論じたトニー・ウォルターは第二次世界大戦を経験した世代の親をもつが、「この世代は、過去についてはほとんど振り返ることはなく、死んだ家族の一員についての話をほとんど語ることなく、とりわけ悲劇的な死の物語については語ることはなかった」<sup>10)</sup>と自己の経験を語っている。広島に落とされた一発の原子爆弾によって一人息子を亡くした夫婦は、戦後二人きりでその後の生涯を送り、被爆時に息子が着ていた遺品について語ることはなかったという。現在、その遺品は夫婦にとってなかったとした記憶として広島平和記念資料館に残されている。<sup>11)</sup>このように兵士のみならずその家族や空襲で肉親を失った者たちは心的外傷に陥っているともいえるが、そこから過去としての故郷そのものへの拒絶反応をみてとることもできるのではないだろうか。さらに病气や事故などにもなう身体的・精神的苦痛、貧困や飢餓、暴力や迫害といったことから過去をなかったものとした人も幾多あるだろう。

ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch)

1903-1985) は過去を求めるあとずさりの欲求を「哀惜」と呼び、過ぎ去っていった安らぎの対象に対する「哀惜」を「ノスタルジア」と定義した。これに対し過去をなかったものとしたたい、つまりは思い出したいとする「悔恨」を対比させ、相反するふたつの感情を「逆行できないもの」と「取り消せないもの」の二重性としてとらえる。<sup>12)</sup>

このことについて四方田犬彦は「ノスタルジア」という語にならって「悔恨」という精神の動きを「ノストフォビア」と名づけ、ミラン・クンデラ (Milan Kundera, 1929) の「存在の耐えられない軽さ」の冒頭を引用して論じている。<sup>13)</sup>「われわれの社会は不可逆的時間論を暗黙の了解としているがゆえに、フランス革命における暴虐ぶりにもはや恐怖することを忘れ、ヒットラーの写真に対してもある懐かしさを感じる事ができる。なぜならいかなる行為ですら、過去のものとなればひとしくノスタルジックな魅力を添付されてしまう世界においては、すべてがあらかじめ容認され、あらゆることがシニカルにゆるぎされているからである。ノスタルジアの心象が覆う領域は人間のはるか無意識の真奥にまで根を張っていて、意識的な決断であるノストフォビアのそれを軽々と包み込んで、はるかに余りがあるといえる」<sup>14)</sup>

確かに自己が体験した過去性を意識するノストフォビアは、意識という領域にあるがために好むと好まざるとにかかわらず時間の経

過によって希薄さを増していく。まさにノスタルジアがノストフォビアの基底にある感性であると位置付ける根拠となりえている。四方田がいうように、無意識の領域にあるノスタルジアは意識の領域から逸脱することのできないノストフォビアに比して、人間の本質的な深淵に内在しているといえるかもしれない。

だが逆行できないものから生まれた欲求である哀惜と、取り消せないものから生まれた悔恨は完全に分離できるものではなく、それぞれの欲求が逆の欲求のなかに多少ともふくまれていいると考えられる。ジャンケレヴィッチも触れているように、みずからを補足したという欲求には、不純さと他者性とに対する危惧がひそかに含まれるからである。<sup>(16)</sup>

## 二 非連続とノスタルジア

これまでみてきたように故郷は様々なかたちでとらえられ、そこから生まれるノスタルジアも一人ひとり同じではない。また故郷とは「今いる場所」から「生まれ育った場所」、また「都会（変化）」から「田舎（不変）」をとらえるといった空間性（土地）に付随していたものが、次第に「現在」から「過去」をとらえる時間性を重視したものへと移行している。このようにノスタルジアには幾多の変遷ととらえどころのない多様性があるにせよ、様々なノスタルジ

アを考察するにつけ、そこには「非連続」という共通のキーワードが隠されていることがわかる。一言でいえば、ノスタルジアは社会や人生に現われる非連続を契機として生まれ、人間の連続性への願望ともいえるのではないだろうか。社会的には戦争や恐慌、天変地異などがこれにあたり、ひとりの人間としては幼少時代の依存期から成人老齢時代への非連続、病気や家族との離別などの非連続などがみられる。<sup>(17)</sup>

近代以降の我が国を例にみると、文明開化、戦争、近代産業の勃興、経済発展という時代の非連続性にもなつて、ノスタルジア論が数多く語られている。現在では昭和ノスタルジアとして様々なノスタルジア論が語られているが、これは太平洋戦争や昭和三〇年代（二九五五年）後半からの高度経済成長によるところが大きい。<sup>(18)</sup> 故郷は都市に出た人々の心の支えであり、ノスタルジアは変化の激しい都市と、昔を温存する農山漁村（あくまでも都市との相対的思考）の社会的現象として見て取ることができる。昭和二九年（一九五四年）に始まった集団就職列車は、多くの東北や九州などの田舎の若者を東京、大阪といった都市に運んだ。こうした点からみれば、日本の都市は田舎である故郷を内包しているといっても過言ではない。<sup>(19)</sup>

こうした現状から取えて危険性を侵して全体的な流れを俯瞰すれば、「都市的なるもの」が「現在」であり否定的にとらえられ、「故郷的なるもの」を「過去」として肯定的にとらえるという図式が現

れる。さらに現在は文明的であり、過去は自然的であるともいえる。佐藤守弘はこれら人間と文明、そして自然の関係を故郷に絡めて次のように述べている。「故郷とは、そこから離れた〈都市〉から、そして過去から切り話された〈現在〉から眼差しされたものである。言い換えれば、故郷とは〈自然〉のなかにある〈無時間的〉〈退嬰的〉〈静的〉な〈過去〉として表象されるものであり、対して故郷を眼差す主体としての都市は、〈文明〉のなかで、〈歴史的〉〈進歩的〉〈動的〉な〈現在〉として表象される」<sup>20</sup>

ただこうした図式はすべての地域、すべての時代間での相互比較から導きだされるものであり、あくまでも「いま・ここ」を基準とした限定的であいまいなるものであることを忘れてはならない。この図式化は「いま・ここ」と「過去」である故郷を比べた場合、「いま・ここ」は文明が発達しており、「過去」は自然に近い状態を想定したに過ぎない。

逆にいえば、「時」が進むとは科学技術が進歩して生活が豊かになり、文明が発達することとみなされ、より人工的な生活、複雑な社会に変容することだと換言できる。現代社会に生きる人間は文明を発達させることによって、次第に始原の姿から遠ざかっていく<sup>21</sup>。その基底には人間と自然との関連性の問題が横たわり、自然への憧憬としてのロマン主義に通じる枝道が見えてくる。

同じように人間と自然の関連性からノスタルジア論に近いもの

として廃墟論があげられる。ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) はその論考「廃墟」のなかで、現在の文明を発達させた人間の歴史を「その始まりから一貫して、精神が自らの外部—もつとも或る意味では内部をも含む—に見出す自然に対する、精神の漸次的な支配権拡張の過程である」とする。そこから廃墟の特質が「人間の手による作品と自然の作用との対峙」であり、その魅力は「人間の手による作品がまるで自然の産物のように感じられる」ことであると主張する<sup>22</sup>。廃墟から感じる悲哀は人間の造形物がいつかは自然に戻るといふ悲哀であり、そこには持続する時間の流れが深く関与してくる。時間性をともなう人工と自然とのせめぎ合い、眼前にない過去に視線が向けられるという点において、またそこから人間の有限性から生まれる悲哀を認めざるをえないという点から、ノスタルジアと相通じるところがあるといえるのではないだろうか。

また始原から遠ざかっていく文明への眼差しからいえば、現在の文明社会が「速度」によって突き動かされているとするポール・ヴィリリオ (Paul Virilio, 1932-) が提唱したドロモロジー (chronologie) も忘れてはならない<sup>23</sup>。現代社会は「いま・ここ」ではない先へ先へと駆り立てる原理によって、常に時間に操られ、時間に遅れまいとする漠然とした不安感を抱くようになった。ヴィリリオは例えの一つとして一九六七年の米ソ六日間戦争 (第三次中東戦争) をあげ、科学技術の進歩による兵器能力の向上によってジョンソン大統領が

自由にできる戦争指揮は限られた機械の操縦を試みるにすぎなくなっていたという。このような状態はますます進み、軍備競争はこうした人間自らによる政治的安全余地の縮小化をさらに推し進め、臨界域に接近させつつあると警告する。これは兵器という社会のひとつの断片を言いあてているのだが、考えてみれば日常生活においてもジェット機や鉄道、自動車といった交通手段、コンピュータ化され高度化したライフラインなども同じことが言える。急速に世界は人間自らの身体で制御できる能力をはるかに超えたところで動くようになった。こうした出来るだけ早く前に前に進もうとする原理に対して、ノスタルジアは過去を振り返る眼差しによって現前にはない別の世界を想起する契機となりえているのである。

このようにみえてくると文明が発達すればするほど、人間が自然から遠ざかれば遠ざかるほどノスタルジアは人間の感性としてしばしば遙曳することとなる。奇しくもこのことは津上が論じたノスタルジアの変遷をよく説明していると思われる。人間と自然、文明はノスタルジアと離隔できない関連があるが、子細な論を述べる紙幅もなく、本旨から逸脱していくためこれ以上は触れない。ちなみに衰退した「現在」からよき「過去」の時代を想起することにより生まれるのがノスタルジアだとすれば、衰退した「ここ」から素晴らしい「かなた」を想像した理想郷がユートピア (utopia) だといえる。しかしこれは感性的なものによって生まれるものではない。ただ目

の前の現実社会ではない点、同じように「いま・ここ」への否定という点で同質のものといえるかもしれない。<sup>24)</sup>

人間はどこまでも「生あるもの」であり、自然(摂理)の中でしか生きられない。現代文明が早く激しい刺激によって変化することを目指すというのであるなら、人間は故郷を想起することによって生まれるノスタルジアによってこれに対抗することとなる。だがこの種のノスタルジアこそ、一般的にいわれるノスタルジアのネガティブなイメージに繋がってしまう。しかしながら近代西欧的文明の真つただ中であつて盲目となつている現代人にとって、こうしたノスタルジアは眼前の世界ではないもう一つの世界への入り口を仄かに照らし出す有用な機能であるといえるのではないだろうか。ひとつの文明が発達すればするほど、ノスタルジアがより強く感じられるのはこの所以であらう。

### 三 「生の記憶」と「時間の不可逆性」

ここまでみてきたように、人間は二義的には自らの生まれ育った所(空間)を故郷としてノスタルジアを感じるのだが、次第にノスタルジアの意味領域は、非連続性を絡めながら故郷という空間的なものから過去という時間的なものへとその基軸を移動させてきた。<sup>25)</sup>

しかし、人間存在の根底にはこれとは異なる「生あるもの」とし

てのノスタルジア、無意識にもたらされるアブリアリな人間の始原を顧みるノスタルジアが沈潜しているのを見ることが出来る。戸澤義夫は音楽論から特定の過去や土地をもたないノスタルジアを指摘し、東山魁夷は実際の故郷ではない自然の中に見出される象徴的で根源的な原風景から生まれるノスタルジアを感じてそれを画いた。<sup>(26)</sup>

こうしたノスタルジアと「生」の関連を考察するに際して、まずエチエンヌ・スーリオ (Etienné Souriau, 1892-1979) の『生きている思考と、フォルムの完全』(一九二五)を春木有亮が論じているので参照したい。それによると『生きること』は『生きていて感じること』であり、生は『存在することの味わい』だとする。生が存在することの味わいであるかぎり、生を根元から捉えるには、『いま・ここ』にある生をとらえられなければならない。ところが瞬間において瞬間の生とそれをとらえる生の主体を分かつことはできないから、生をとらえることはできない。<sup>(27)</sup>となる。この論理からすれば、『いま・ここ』にあつて流れ去ろうとしている瞬間を顧みることしかできない人間。この瞬間にノスタルジアの微小表象としての「生の記憶」が生まれていると考える。つまり瞬間に過去になろうとしている「いま・ここ」に思いをよせることから生まれるノスタルジアこそが、故郷(過去)を顧みて感じるノスタルジアに繋がるとともに、さらには遠く一人の人間を超えた過去を懐かしむ「生の記憶」としてのノスタルジアに肥大していくと考える。

ここには決して戻ることのできない「時間の不可逆性」が流れていることも忘れてはならない。人生は絶対的一回性で貫かれており、今見た風景と全く同じ風景は二度と見ることができない。つまり空間上の移動は元に戻ることができても、時間上では戻ることが絶対にできないというわけだ。そこに「人間の有限性」と生から死への「時間の不可逆性」の問題が静かに横たわっている。人間はそのことに無力感・悲哀を感じざるを得ず、過ぎ去っていった人生にノスタルジアを感じることとなる。

これに対し、ジャンケレヴィッチは次のようにノスタルジアの積極的な解釈をおこなっている。「思い出が特別に栄光に満ちたものである必要はない。ノスタルジアに捉えられる者はかつて幸福であったことも、人を愛したことも必要ではない。そのときとくに若かったことも不可欠でさえない。一般に存在した、そして存在して、機に応じて生き、愛し、そして苦しんだだけで十分だ<sup>(28)</sup>」と。ノスタルジアにとつては過去に起こった事象が問題なのではなく、過去という事実、過去一般という不特定過去性が問題になるといふのだ。

ここにおいて、ノスタルジアは戻ることも留まることもできない時間の不可逆性をともない、『いま・ここ』を生きる難しさを秘める人間存在のアブリアリな領域にまで到達することとなる。人間は自らの力ではどうにもならない時間の檻から決して逃れることができないため、生ある自分の有限性を感じるとともに理性の絶望を感じ



じてしまう。故郷で見た情景を想起することは人間の生から死への諦めと、戻ることのない時間（刹那としての時間から悠久の時間まで）の不可逆性における悲哀を感じることであり、そこから「なかった」とできない過去を知ることである。これこそがノスタルジアの基底を流れる源流といえるのではないか。

瞬間的に逃れる「いま・ここ」からノスタルジアが生まれる論理を、先のジャンケレヴィッチは鳴り響く教会の鐘の音に譬えている。具体的な形の見えない鐘の音は、打ち出された瞬間から四方八方に広がって周りの山々や家並みにこだまし消えていく。鐘の音は耳に直接聞こえている（現前している）にもかかわらず、正しく捉えどころの無い時間性をともなっている。まさにこのことは、その人にか見えない故郷から現実的時間を伴わず想起されるノスタルジアを連想させる。ノスタルジアは故郷（過去）が戻ることのできない幻影であることを確認すると同時に、「いま・ここ」に存在する人間が「なかった」とできない存在であることを知らしめ、人間の抱く有限性への不安を打ち消す力となっている。そのためにノスタルジアは人間存在の根底に揺曳しているといえるのである。

#### おわりに

最初に、故郷が実体としてあるのではなく想起されるものである

ことからそれぞれの故郷感が異なっていること、時代の推移によってノスタルジアは過去に対する肯定的意味合いを深めていることを確認した。続いてノスタルジア概念の変遷にもなって「非連続」というキーワードを用い、「都市的なるもの」と「故郷的なるもの」、「現在」と「過去」、「否定的」と「肯定的」といった図式でノスタルジアの解明を図った。そこから「いま・ここ」にある生をとらえられない人間だからこそノスタルジアが生まれ、その基底には決して戻ることのできない「時間の不可逆性」が沈潜していることを認めた。

このように本稿はノスタルジアに関連する事項をできるだけ多く網羅することで、多方面からの探求がおこなわれているノスタルジアを感性的な面から醸し出そうと試みた。このためランダムな論展開となり散漫な論考となったことは否めないが、一人の人間に遥曳するノスタルジアが「人間の生の記憶」「時間の不可逆性」を意識させる契機となりうるものであることを確認することができた。このことは人間と自然の関連、さらには文明論へと展開する糸口ともなりえるものであり、人間が抱いている有限性への不安を打ち消す力ともなっている。一人の人間が故郷を想起することから生まれるノスタルジアは生きる力と創造力へと繋がり、「かつて生きた人間の存在をなかったことには決してできない」「絶対的存在を保障するもの」として、人間がその有限性から生じる不安を救済すること

ができるのである。近年、ノスタルジアという言葉を開く機会が多い。現代芸術や歴史系博物館においてノスタルジアを活用した展開が図られるのも、現代文明が始原の人間の姿から急速に変容しているからにはかならない。現代文明が進歩すればするほど人間本来の姿を思い出すべく、ノスタルジアはますます強く感じられることとなる。

故郷喪失の時代といわれる現在、「自然」「生」と根底で繋がっているノスタルジアは人間と科学技術や物質文明の間隙に遙曳し、新たな人生、もうひとつの文明に挑戦する契機となりえるものであると結論づける。こうした人間の根源を顧みるノスタルジアは、時代や場所に関わらず人間が人間であるための記憶を呼び起こす機能を内包することにより、攫むことのできない「いま・ここ」にしがみつくことを意識させる感性であるといえる。

註

- (1) 安来正博「世界の片隅で現代美術が見る夢」『ノスタルジー&ファンタジー—現代美術の想像力とその源泉』国立国際美術館、二〇一四年、七—一四頁
- (2) 鈴木勝雄「ブラジル・ボデイ・ノスタルジア」『ブラジル・ボデイ・ノスタルジア』東京国立近代美術館、二〇〇四年、一三頁
- (3) 日本博物館協会の研究会でも回想法が取り上げられるに至っているが、北名古屋歴史民俗資料館ではすでに平成一四年度に回想法を導入し、「地域回想法」という手法を確立、実践している。

(4) 「日本国語大辞典」では「古郷へは錦をきて帰れ」という平家物語の用例が掲げられている。

「故郷は多くの問題系・問題群をもち、矛盾する要素が併存し、評価が語り手によっても定めえぬ、複雑な対象によってつくりあげられている。故郷はあらゆるものもろこまれる器としても機能し、近代日本のさまざまな事象が流れこむ拠点ともなり、いっそう錯雑するものとなる」(成田龍一「故郷という物語」吉川弘文館、一九九八年、二四—二五頁)

(5) あくまでも当時は失意、抑うつ状態、情緒不安定といった症状をもつ、脳内の血液からくる身体的病気としてノスタルジアはとらえられている。

ただし、同じ意味合いで使われた郷愁 (Heimweh) の語が、すでに一五六九年には「ズネンベルク Heimweh で死す」と文献にみられるとの論文もある。(宇和川耕一「故郷の射程—ドイツにおけるディスクルを通じて—」『愛媛大学法文学部論集人文科学編』第二二号、二〇〇七年、三四頁)

(6) 「自らも故郷、山口県周防大島を終生忘れなかった。小さいときに美しい思い出をたくさんつくっておくことだ。それが生きる力になる。学校を出てどこかへ勤めるようになると、もうこんなに歩いたりあそんだりできなくなる。いそがしく働いていき入れるとき、ふつと、青い空や夕日のあたたか山が心にかんできると、それが元氣を出させるものになる」(宮本常一『民俗学の旅』講談社、一九九三年、七五—七六頁)

(7) 「智恵子は東京に空が無いといふ、／本当の空を見たいといふ。／私は驚いて空をみる。／桜若葉の間に在るのは、／切つてもきれいな／むかしなじみのきれいな空だ。／どんよりけむる地平のぼかしは／うすも色の朝のしめりだ。／智恵子は遠くを見ながら言ふ。／阿多多羅山の山の上に／毎日でてゐる青い空が／智恵子のほんとうの空だといふ。／あどけない空の話である」(高村光太郎「あどけない話」、一九二八年)

(8) 「故郷は遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの／よしや／

- うらぶれて異土の乞食となるとても／帰るところにあるまじや」(室生犀星「小景異情」、一九一三年)
- (9) 津上英輔「過去の現前・感性的範疇としての『nostalgia』」『美学』第 二二二号、美学会、二〇〇五年、一一—一三頁
- (10) トニー・ウォルター「忘却、記憶、そして哀悼の不可能性」関沢まゆみ編『戦争記憶論—忘却、変容そして継承』昭和堂、二〇一〇年、二五—二七頁
- (11) 広島平和記念資料館平成三三年度第一回企画展「生きる—一九四五・八六その日からの私—」広島平和記念資料館、二〇一一年、三頁
- (12) ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ『還らぬ時と郷愁』仲澤紀雄訳、国文社、一九九四年、二七九—二九五頁
- (13) ジャンケレヴィッチは前掲書、二八五頁において、逆行できないものから生まれた欲求と取り消せないものから生まれた欲求のそれぞれが、逆の欲求のなかに多少なりともふくまれていたことを示唆し、そこに生まれる嫌悪を「恐怖症(Phobia)」と名づけている。
- (14) ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』千野栄一訳、綜合社、一九九三、六—八頁
- (15) 四方田犬彦『書物の灰燼に抗して—比較文学論集』工作舎、二〇一一年、四二—四六頁
- (16) ジャンケレヴィッチ前掲書、二八五頁
- (17) 社会学者のフレッド・デーヴィスはノスタルジアを感じる契機として私的なものと集合的なものとに大別している。私的ノスタルジアとは、その源泉が特定の個人の生活史に見だされるもので、過去の象徴的なイメージとか暗示を指している。特定の個人にとっては、瑣末なことながらも重要であり、それが大いに個人としての彼独自のアイデンティティの基礎をなしている。
- これに対し集合的ノスタルジアとは、象徴の対象の性格が高度に公共性を有し、広く共有され、よく知られていて、過去から引き出された象徴的資源がしかるべき条件のもとでは、同時に何百万もの人びとにノスタルジックな感情のうねりを次々に誘発できるような状況を指している。(フレッド・デーヴィス『ノスタルジアの社会学』世界思想社、一九九〇年、一七六—一七八頁)
- (18) 昭和ノスタルジアとは一九五五年(昭和三〇年)前後から一九七三年の第一次オイル・ショックで終焉を迎えたとされる、いわゆる高度経済成長期の時間幅と重なることが多い。戦後、我が国は著しい復興と経済発展を遂げ、高度経済成長により一九六八年(昭和四三年)には国民総生産(GNP)が一四二億ドルとなり、西ドイツを抜いて世界第二位の経済大国になった。貧しかったが人々の心は豊かで希望に溢れていた時代から虚構の時代へのターニングポイントとして、その後の日本社会の分水嶺を一九七〇年前後とする説もある。(日高勝之『昭和ノスタルジアとは何か—記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学—』世界思想社、二〇一四年、一九頁)
- (19) 成田龍一『故郷』という物語』吉川弘文館、一九九八年、一八一—二二三頁、一四八—一四九頁、一七三頁
- (20) 佐藤守弘「郷愁のトポグラフィ—一九一〇年代の日本における風景写真の政治学—」『文化學年報』第五二輯、同志社大学文化学会、二〇〇三年、二六—二頁
- (21) 宮本常一は次のように述べている。「文明の発達ということは、すべてのものがプラスになり、進歩してゆくことではなく、一方では多くものが退化し、失われてゆきつつある。それをすべてのものが進んでいるように錯覚する。それが人間を傲慢にしていき、傲慢であることが文明社会の特権のように思いこんでしまう。」(宮本常一『民俗学の旅』講談社、一九九三年、二〇三頁)
- (22) ゲオルク・ジンメル「廢墟」『ジンメル著作集7—文化の哲学』円子修平・大久保健治訳、白水社、一九九四年、一三八—一四一頁
- (23) ポール・ウィリリオ『速度と政治—地政学から時政学へ』市田良彦訳、平凡社、一九八九年、一九六—一九七頁
- (24) ユートピアとは一六世紀にトマス・モアが『Utopos(場所)』というギリシア語にπτόしという否定詞を被らせて作り出したとされる。科学の発展が人間を幸福へ導くことを信じ、人類は善良にして幸福な未来にむけて進歩していくものだという確信がユートピアを生んだ。
- (25) 津上英輔「過去の現前・感性的範疇としての『nostalgia』」『美学五五』

美学会、二〇〇五年、一一—三頁

(26) 「私が音楽を聴く時、特にその調べに没入する時、不思議なことに私は、はるかなる彼方へ、そして単にそれだけでなく、懐かしき彼方へと、従って私の過去へ、私の故郷へ、そして私の幼き日々へと向かっているように感じる。私はノスタルジクになっている。しかもである。私は何らかの日付のある特定の過去や、この地球上の私の育った土地へ向っているのではなく、過去一般、今は過ぎ去り、二度と再び巡っては来ぬが、しかしかつて確かに私の体験した過去へと向かっているかの感を持つ」戸澤義夫「ノスタルジーと音楽(二)——時間の時間性を巡って——」『群馬県立女子大学紀要』第一号、一九八一年、二二七頁

(27) 「放浪する者は故郷を遠く離れ、その心は絶えず流れ去って行くものに従い、休む時もなく青い山の向こうへ牽かれてゆく。それでいて、常に探し求めているものは、心のやすらぐ場所——故郷ではないのか。私は横浜の海岸通りで生まれ、神戸で少年時代を過ごした。きれいな川の流れる田園風景は、本来の私の故郷的イメージではないはずだ。むしろ、港、船、赤煉瓦の倉庫などのほうが、記憶のいつも、はつきり写し出されている。港や船や倉庫は、私の心の奥の引き出しの中に、しまい込んでいる故郷であって、追憶の中の現実の風景であり、それは、私という人間の形成過程の上で、いつも、地底の泉のように、にじみ出てくるものであるが、私はもう一つ奥にある引出しの中身に、気付いたのではないだろうか。それは、汽船や赤煉瓦とはちがって、きれいな水の流れる青い山の風景である。後者は象徴的であり、より根源的であると云えるかもしれぬ」東山魁夷「風景との対話」新潮社、二〇一一年、二七頁

(28) 春木有亮『実在のノスタルジー——スーリオ美学の根本問題』行路社、二〇一〇年、二四—二六頁

(29) ジャンケレヴィッチ前掲書、三八五頁

(30) ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ『遙かなる現前——アルペニス、セヴラック、モンボウ』近藤秀樹訳、春秋社、二〇〇二年

参考文献・資料

- (1) 磯前順一『喪失とノスタルジア——近代日本の余白へ』みすず書房、二〇〇七年
- (2) ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ『還らぬ時と郷愁』仲澤紀雄訳、国文社、一九九四年
- (3) ヴラジミール・ジャンケレヴィッチ『遙かなる現前——アルペニス、セヴラック、モンボウ』近藤秀樹訳、春秋社、二〇〇二年
- (4) 宇和川耕一『故郷』の射程——ドイツにおけるディスコースを通じて——『愛媛大学法文学論集』第二二号、愛媛大学法文学部、二〇〇七年
- (5) 金子淳「ノスタルジー研究の現在と博物館における昭和ノスタルジーのゆくえ」平成二二年度静岡県民俗学会大会記念講演録、二〇〇七年
- (6) 北名古屋歴史民俗資料館編『博物館資料の資源化——昭和日常博物館の可能性』北名古屋歴史民俗資料館研究紀要一、二〇〇七年
- (7) 桑島秀樹『故郷』の表象可能性とその限界——美学としての故郷論序説——第一二回日韓美学研究会報告書、二〇〇四年
- (8) ゲオルク・ジンメル『廃墟』ジンメル著作集7——文化の哲学』円子修平ほか訳、精興社、一九九四年
- (9) 佐藤守弘「郷愁のトポグラフィ——一九一〇年代の日本における風景写真の政治学——」『文化學年報』第五二輯、同志社大学文化学会、二〇〇三年
- (10) 谷川渥『廃墟の美学』集英社、二〇〇三年
- (11) 津上英輔『過去の現前——感性的範疇としてのnostalgia』『美學』五五巻三号、二〇〇五年
- (12) 津上英輔『懐かしとnostalgia——比較美学から感性史へ』『美學美術史論集』第一八輯、二〇一〇年
- (13) 津上英輔『あじわいの構造——感性化時代の美学——』春秋社、二〇一〇年
- (14) 戸澤義夫「ノスタルジーと音楽(二)——時間の時間性を巡って——」『ノスタルジーと音楽(二)——瞬間と持続——』『ノスタルジーと音楽(三)——哀惜の構造と想像力——』『群馬県立女子大学紀要』第一号、一九八一年
- (15) 戸澤義夫「ジャンケレヴィッチの『夜想』と想像力」『藝術と想像力』

今道友信編、東京大学出版会、一九八二年

(16) 成田龍一『故郷という物語』吉川弘文館、一九九八年

(17) 西村清和『フィクションの美学』勁草書房、一九九三年

(18) 春木有亮『実在のノスタルジー—スーリオ美学の根本問題』行路社、

二〇一〇年

(19) 日高勝之『昭和ノスタルジアとは何か—記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』世界思想社、二〇一四年

(20) 吉岡史朗『「となりのトトロ」に見る「なつかしさ」と『ノスタルジア』』

『季刊日本思想史—近代とノスタルジア』第七七号、ペリカン社、

二〇一〇年

(21) 四方田犬彦『書物の灰燼に抗して—比較文学論集』工作舎、

二〇一一年

本稿は二〇一五年八月一日、広島県立美術館でおこなわれた広島芸術学会第二九回大会の研究発表に加筆・訂正したものである。

(ぬまた・ありふみ／広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期)